ブンとフン

（井上ひさし）

ブンとフン

（井上ひさし）

ブンとフン

昭和四十七年九月十一日初版発行
昭和四十七年九月三十日二版発行
定価四八〇円

著者　井上ひさし
発行者　田中恒夫
発行所　株式会社　朝日ソノラマ
東京都中央区銀座四の二の六
〒一〇四　電話（五六三）六〇二一
振替東京四〇三一一
印刷所　凸版印刷株式会社

著者との了解により検印を廃止いたします

乱丁本、落丁本お取替えします　©Hisashi Inoue 1972

(分)0095 (製)003009 (出)0049

ブンとフン■井上ひさし

装幀　湯村　輝彦

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

第一章　ブンとは何者か

行っちゃいけない
戻っておくれ
行かねばならない
離しておくれ
つもる別れは　傘の上
名残り棄つるは　傘の下
イヨーッ！　ブンとフン！

秋もおわりのある寒い夜のことである。

岡の上の畑のまん中にたっている一軒家で、小説家のフン先生は、冷飯に大根のつめたいみそ汁をぶっかけて、その日七度目にあたる食事を胃の中へ流し込んでいた。

「ぶるぶるぶる。べつに大きな望みはないけれども、せめてこんな寒い夜には、熱いインスタントラーメンでもたべたいものだ。おやおや、もうお釜の中にはごはんがないな。明日はまた一週間分のごはんをたかなくてはならんな。」

フン先生はでこぼこの大釜で一週間分のごはんを一度にたき、ふたのない古なべでバケツひとつ分ぐらいのみそ汁を煮ることにしている。

これは、フン先生がものぐさのめんどうくさがり屋であるせいもあるが、じつは一週間分の食事をまとめてつくってしまった方が、そのつど、炊事をするよりも燃料が安くあがるので先生にとって大きな魅力だったのである。

これでわかるように、フン先生は流行作家ではない。これまで、いろんな小説をいろんな出版社から出版したが、どういうわけか、ほとんど、といっていいぐらい売れないのであった。おまけに、先生の小説を出版した本屋さんはきまったようにつぶれてしまう。これまで、いちばん売れた本でも、ただの五冊だというから、これじゃ本屋さんだってたまったものではない。つぶれるのはあたりまえだ。

みそ汁の実はとなりの畑から、真夜中に失敬してくる。トマトがなっていればトマト汁、ナスの季節にはナス汁、そしていまは大根の季節なのでみそ汁の実は大根なのである。

となりの畑の持主であるお百姓さんは、フン先生が畑から、トマトやナスやカボチャや大根をちょろまかしていくことはうすうす察していたが、お百姓さんは小説家というものを尊敬していたから何もいわなかった。

「おれたち百姓は畑をよくたがやして、こやしをやって、種子をまいて、あとはお天道様の光と雨に

まかせておけばなんとか作物がなるが、小説家の先生はそうはいかん。一字一句、ペンで書かなくては小説はできない。なにしろたいへんな仕事らしい。」

お百姓さんは畑仕事のあい間にフン先生の仕事ぶりを見たことがあった。それは暑い夏の午後だったが、フン先生はクーラーも扇風機も買えないので、玄関のたたきに井戸の水を流して池のようにし、そこへ机を持ちだし、パンツ一枚で、水の中に足をつけながら、宙をじっとみつめ、

ぴっ！　ぴっ！　ぴっ！

と鼻毛を抜いては、その鼻毛を、机のはしにさかさに立てて植えつける作業に熱中していた。

じつをいうと、フン先生はそのとき、

「ああ、アイスクリームがたべたいな。氷水でもいい。シャーベットもなかなかけっこうよ。冷やしたスイカもオツなもんだ。うむ、今夜あたり、となりの畑からスイカをひとついただいてこようかしらん。」

などと、お百姓さんが聞いたら顔いろをかえそうなことを考えていたのだが、お百姓さんはそんなこととは露知らず、

「フン先生のあのきびしい顔つきはどうだ。きっと、人生とは何かというような大問題について考えてらっしゃるにちがいない。お仕事の邪魔になってはいかん。きょうは早じまいにしよう。」

まだ、はやいのに家へ帰ってしまった。

さて、冷飯をたべおわると、フン先生は原稿用紙の書き損じを机の上にひろげ、灰皿のなかみをその上にぶちまけ、

「まだすえる煙草はないものか。」

ぶつぶつつぶやきながら吸がら探しをはじめたが、そのとき、自動車のヘッドライトのあかりが、破れた窓ガラスのすき間からちらりと見えた。そして、おどろいたことに自動車はフン先生の家の前にとまったのである。

「はてな。」

フン先生は吸がらに火をつけながら考えた。

「わしには、こんな夜ふけにたずねてくるような親しい友だちはおらんぞ。借金とりはだいぶいるが、連中はこんな夜ふけにたずねてくるようなことはせんし、だいいち、わしをさかさにしてふっても、一円だって出ないことをしっているから、このごろは催促にもやってこない。考えられるのは泥棒だが、このあいだ押し入った泥的なんぞ、うちになにひとつ目ぼしいものがないので、呆れて帰ってしまったぐらいだ。帰りがけにわしに同情したのか、やきいもを一個おいていった。こんども泥棒だったらしめたものだ。ひとつ、おどかして米代ぐらいせしめてやろう。」

これではどっちが泥棒だかわからない。しかし、はいってきたのは泥棒ではなかった。

「やあ、フン先生、ごぶさたしました。アサヒ書店ですよ。」

フン先生は、あいてが泥棒ではないのでがっかりした。
「なんだ、あんたか。あんたじゃハラのタシにはならん。だが煙草ぐらいは持っとるじゃろう。一本すわせてくれ。」
「そうおっしゃるだろうと思って、煙草を二十箱ほど買ってきましたよ。」
アサヒ書店のオヤジは、左手に抱きかかえた茶いろの紙袋の中から、まず煙草をいくつもつかみだしてフン先生の前にならべた。
「それから、先生の大好物のインスタントラーメンが五十袋。シャケカン、カニカンが各三個ずつ。番茶が一袋。ゴマせんべいが一袋……」
夢にまで見た大好物の数々が机の上に並べられていくのを、フン先生はうっとり眺めていたが、急に疑い深そうな目つきになった。
「アサヒ書店の社長さん、これはどういうつもりだ。わしをからかってるのかね。いやきっとそうにちがいない。わしにさんざん見せておいてから、またしまってしまうんだろう?」
「なにおっしゃいますか、先生。これは、ほんの手土産ですよ。さァ、五十万円の小切手を持ってまいりました。受けとりにサインをおねがいしますよ。」
アサヒ書店のオヤジがポケットから出したのは、たしかに小切手だった。「5」の横に「〇」が五つも並んでいる。

「じつは、フン先生、この夏、先生に書いていただいた小説『ブン』が売れているんですよ。一か月前に一万部刷ったんですが、もう売り切れてしまいましてね。こんどまた一万部刷ることになったんでして。これはそのお金です。どうぞお納めください。」

フン先生は地震のときの肉屋の店先のコンニャクのように震えだした。

算数の苦手な諸君が、算数の試験でなにひとつ満足に問題が解けもせず、〇点覚悟で出した答案が百点で返ってきて、こわい先生に頭をなでられ、家ではお父さんお母さんにほめられたら、だれだってまごつくはずである。

また九回二死満塁でピンチヒッターに立った万年補欠選手が、盲滅法バットを振りまわし、手応えがないので、こりゃまた三振かとすごすごベンチにもどろうとしたら、監督がにこにこ三塁のコーチャーズボックスから「やった！　逆転満塁サヨナラホーマーだ。おーい、ベースをまわってこい！」と叫んでいるのに気づいたら、これはとまどうだろう。

フン先生もとまどった。ばかにされていると思った。そして怒った。フン先生には、お金も財産も奥さんも子どももなかったが、それを埋めてあまるほどの自尊心があった。自尊心のかたまりといってよかった。もうひとついうなら、自尊心が無精ひげ生やして、腹をすかせているようなものだった。

「わしをあまくみてなめちゃいかん！　わしの本がそんなに売れてたまるか。そんなはずはない。な

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

にかの間違いだ。だれかの陰謀だ。悪だくみだ。貴様、悪魔ならとっとと消えうせろ。狸ならとっつかまえて、狸シチューにしてくってしまうぞ。そして夢ならさめよ！」

しかし、アサヒ書店のおやじはべつに悪魔でも狸でもなかった。フン先生を椅子にすわらせ、まだぶるぶる震えている右手に万年筆を持たせ、

「フン先生、わたしはもう帰らなくちゃなりません。ひとつサインをおねがいします。」

五分後、アサヒ書店のおやじが車にとびのって帰ってしまうと、フン先生は、古なべをガス台にかけ、湯をわかしはじめた。

「とにかく、インスタントラーメンをくっちまおう。本が売れたのはやっぱりまちがいでした。さっきのラーメン返してください、といわれても、くってしまえばこっちのものだからな。しかし、もしほんとうにあの『ブン』という小説が売れているとすると、それはなぜなのか。そんなにおもしろいものを書いたおぼえはないが……。よろしい。ひとつ読んでみよう。」

なさけのない小説家もあったもので、フン先生は押入れのボロトランクの中から小説「ブン」の生原稿をひっぱりだし、机の上にひろげると、まず、表紙をながめた。

原稿のまん中に下手くそな字でばかでかく「ブン」と書きなぐってある。ページをめくると、長ったらしい副題。

「鼻は猟犬のごとくよく効き百メートル先のギョウザとシューマイの匂いを嗅ぎわけ、視力は二・五で鷹より鋭く千メートル先の南京豆と塩豆を見わけ、耳は鼠より敏く一万メートル先の針が落ちた音とゴミが落ちた音を聞き分け、男でもあり女でもあり、その上怪人二十面相など足元にも及ばぬ変装術の名人で、一秒前に皺くちゃの梅干ばあさんに化けたかと思えば、一秒後にはよぼよぼのじいさま、二秒後にはミス・ユニバース、三秒後には金太郎のようなまるまるふとった赤ちゃんにも化け、古今東西のあらゆる学問にくわしく、特に物理学にたいする理解はアインシュタイン博士もシャッポを脱いでその白髪頭をさげるという――――大泥棒ブンの華麗なる冒険生活」

フン先生はわれながら呆れてしまった。

「金魚の糞のようにただただ長いだけの副題ではないか。しかし、ひょっとしたらこのばか長い副題のおかげで売れたのかもしれぬぞ。なにしろ妙なことが流行する世の中だからな。」

フン先生はもう一枚原稿をめくった。いよいよ本文である。それはこんな書きだしで始まっていた。

「ブンとは何者か。ブンとは時間をこえ、空間をこえ、神出鬼没、やること奇抜、なすこと抜

群、なにひとつ不可能はなくすべてが可能、どんな願いごとでもかなう大泥棒である。ブンは光の速度の四分の三の速さでとび、過去へもスイスイ、未来へもツウツウ行けるのである。石川五右ェ門とかネズミ小僧次郎吉とか、アルセーヌ・ルパンとか怪盗ジバコとか、三億円の輸送車泥棒とかそのほかいろいろと世に大泥棒の数は多いが、どんな大泥棒も、この大泥棒の前に出ては赤ン坊、いや借りてきた猫同然、というのはなぜか。それはブンが四次元の男だからである。」

（こりゃなかなかの名文じゃわい。わしはやっぱり小説家、なかなかうまいところがあるぞ。）

フン先生は煮立ってきたお湯の中にインスタントラーメンをほうりこみながら、うきうきして、鼻唄をうたいはじめた。

ああ　ブン
おお　ブン
ブン　どこにでもいる　ブン
ブン　だれにでもなる　ブン
ふしぎな　ブン

ゆかいな　ブン
すてきな　かわいい　ブンブンブン……

古なべが、ぷわーっとこまかい泡を吹きだした。フン先生は、ラーメンのだしを丼にあけ、お湯でうすめ、煮えたラーメンの水気を切って丼の中にあけた。

「なにはともあれ、けっこう、けっこう。こうやって寒い夜に、熱いラーメンがいただけるのじゃからな。いただきます。」

箸をとろうとして、フン先生は思わずぎくりとした。ラーメンから立ちのぼる湯気の向うにだれかいるような気がしたからだった。

「あっ、貴様、やっぱりアサヒ書店の社長だな。いままでのことはぜんぶ冗談、お金とわしの大好物をみんな返せというんだろう。ふん、狸オヤジめ。どうもはなしがうますぎると思ったわい。うまいはなしに気をつけろというが、いかさま、ほんとうであった。だがな、狸オヤジ、いっておくがこのラーメンだけは、わがはい、死すとも貴様には返さんぞ。」

いうよりもはやく、フン先生は口をアゴが外れるばかりに大きくひらき、その中にラーメンをぶちあけた。これはあとのはなしだが、フン先生は口の中はもとより、ノドから食道にかけてかなりの火傷を負い、数日間は、ものをのみこむたびに死ぬような苦しみを味わわねばならなかった。もっとも

そのために、食事の量ならびに度数はいささかもへりはしなかったけれども……。
「フン先生、はじめまして。」
アサヒ書店の社長はガラスを爪でひっかくような声の持主だが、テーブルの向うの人影はわりと低い、いい声でいった。
「猫なで声でだまされるようなわがはいと思うか。じつにひとをなめとる。こうなったら意地だ。ゴマせんべいも返してやるものか。」
フン先生はふたたび口を大きくあけ、ゴマせんべいを袋ごと、口に押し込もうとした。
「フン先生、血迷っちゃあいけませんや。わたしですよ、わたし。」
テーブルの向うの人影は椅子を引いて、ゆっくりとその上に腰をおろすと、右手を宙に浮かし、空気をかきまぜでもするようにひらひらと妙な手つきをした。
すると、驚いたことに、そいつはもう右手に火のついた煙草を二本持っていたのである。
「先生、どうですか、いっぷくなさっちゃ。」
フン先生は、たとえ相手が親の仇でも、せっかくすすめてくれるのをことわるのは失礼である、という考えの持主であったから、素直に煙草をもらって、ひといき深く煙をすいこんだ。
「ふーっ。狸オヤジめ、どこで手品など仕込んできたのだ。」
「フン先生、わたしはアサヒ書店の社長なんかじゃありませんぜ。ブンという男……ま、いまんとこ

ろは男ですよ。」

アサヒ書店の社長はビア樽の上に南瓜をのっけたような体つきをしていたが、ブンと名乗ったそいつは人間の身体の上に人間の頭をのせ、間を首でつないだような体つきをしている。

「ふーん。どうやらこれはひとちがいだったらしい。しかし、あんたはどうやら非常識かつ馬鹿な人間らしいな。」

「ほう、そうですかね。」

ブンと名乗ったそいつはべつに怒りもせず、ふたたび、右手を宙に浮かしてひらひらと振った。するとまたまた驚いたことに、そいつは右手にブランデーグラスを持っていた。それから、つぎにブランデーのびん。

「まあ、先生、いっぱい、いきましょう。」

注いでくれるのをフン先生はまた素直に受けとって、ひと口、ごくり。

「ほう、こりゃすばらしい酒だ。あんたの手品の腕前のすばらしさにめんじて、あんたが許可もなしにわがはいの家にはいりこんだ非常識さと、いまのところは男だといった馬鹿なことばは忘れてあげよう。」

ブンと名乗ったそいつはにやりと笑った。それから立ち上がって、ぶるぶる、妙な腰つきをした。するともうそこにはひとりの若い女が立っていたのである。しかもはだかで——。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.